

国際的な記念日〈ホームムービーの日〉の活動とこれから

石原香絵/竹森朝子

Kae Ishihara, Asako Takemori

10月の第3土曜日は、知る人ぞ知る〈ホームムービーの日 Home Movie Day, HMD〉である。毎年この日に、地域や家庭に眠る映画フィルムの持ち寄り上映会が世界各地で同時開催されている。HMDの「ホームムービー」とは、アマチュアフッテージ、小型映画、オーファンフィルムといった名称で呼ばれる幅広いジャンル・形状の動的映像資料を指し、会場によってはVHS等の磁気テープも含まれる。しかし何となくも実際に持ち込まれる資料の大半を占めるのは、長いあいだ押し入れや引き出しの奥に忘れられていた8mmフィルムである。

HMD会場では、映画フィルムの劣化や損傷の具合をフィルムアーキビストが原則としてその場で調べて映写の可否を判断するが、コンテンツで選別することはしない。客席の中に置かれた映写機のカタカタという音とともにスクリーンに甦るのは、小学校の運動会や家族旅行の記録に学生時代の自主映画——そんな退屈なものを見せられても苦痛などではないか、と眉をひそめられるかもしれないが、心配はご無用。抱腹絶倒とはいかないまでも、持ち主の解説に耳を傾け、あるいは自由にお喋りしながらの鑑賞は魅力に満ち、まるでお茶の間の再現のような独特の面白さがある。そうでなければHMDが20カ国80都市以上にまで広がることはなかったであろう。

現在も一部の熱心な愛好家たちによって制作や上映が続けられ、その一方デジタル媒体に複製されて、高齢者向けの「回想法」(昔の映像を観て記憶を鮮明に思い出すことによって認知症の予防に役立つといわれる)や新たな作品の中で二次使用されることもある8mmフィルムは、HMDが始まった2003年の時点でその全盛期から30年が経過し、当然ながら一般的には時代遅れのメディアとなっていた。だが前述のような、撮影当時とはまた異なる映像の価値に光を当て、身近なところからその救

済を訴えることこそ、HMDの目的である。

HMDを発案したのは、米国でフィルムアーキビストの専門教育を受けた第一世代の若者たちだった。現在は、彼らが立ち上げたホームムービー・センター (Center for Home Movies, CHM) が全世界のHMD会場や世話人(=各地のHMD会場の代表者)の取りまとめを行っている。また、世話人の多くは米国に本部を置く動的映像アーキビスト協会(Association of Moving Image Archivists, AMIA)の会員でもある。米国の地域映像アーカイブの先駆け、ノースイースト・ヒストリック・フィルム(NHF)で当時活躍していたリズ・コフィー(現ハーバード・フィルムアーカイブ)²の呼びかけに答え、日本でも初年度から映画保存協会はじめ様々な団体によってHMDが開催されてきた。1年目は愛知県豊橋市と福岡県福岡市の2会場に過ぎなかったが、いつの間にか米国に次いで多い約15会場にまで増え、海外の関係者からどうしてそんなに盛り上がっているのかと不思議がられるほどである。しかし米国と並走しているようでいて、実は日本は周回遅れなのではないかと感じることも少なくない。

米国では、「米国映画保存法」(1988年)に基づき、「文化的、歴史的、美学的に重要な米国映画を毎年25本登録する」ナショナル・フィルム・レジストリーによって、2014年12月の時点で650作品もが永久保存の対象となっていることをご存知だろうか。米国の映画保存政策が非商業映画の救済に向けて舵を切った1994年³、このレジストリーに初めてアマチュア撮影の8mmフィルム——ケネディ大統領暗殺の瞬間を捉えた*Zapruder Film* (1963年)——が加わり、日系米国人収容所内の暮らしの様子を隠し撮りした*Topaz* (1943-1945年)、アマチュア作家シド・ラヴァレンツの傑作*Multiple Sidosis* (1970年)、前述のNHF所蔵の地域映像*From Stump to Ship* (1930年)等がそれに続いた。全米映画保存基金(National Film

Preservation Foundation, NFPF)はこうした非商業映画の長期保存を積極的に支援している。さらに2006年以降、HMDで上映された*Think of Me First as a Person* (1975年)、*Our Day* (1938年)、*Disneyland Dream* (1956年)の3本がナショナル・フィルム・レジストリーに登録された。例えばアマチュア制作の16mmフィルム*Our Day*は、2008年にHMDニューヨーク会場のアンソロジー・フィルム・アーカイブズに持ち込まれ、CHM創設メンバーの一人、ケイティ・トレイナー(現ニューヨーク近代美術館映画部)によって上映されたことが登録のきっかけだった。

このように米国の映画保存政策とHMDとが連動している一方で、日本のHMDで上映された映画フィルムは、「捨てないでください」というメッセージや家庭での保管方法を簡単に記した用紙を添えて返却するのがやっとなで、たとえ持ち主が収集保存機関への寄贈を望んでも、受け入れるだけの余裕のある機関はそう簡単には見つからない。そこで映画保存協会としては、地道な現物保存やオリジナルの上映形態を維持するHMD会場をこれからも応援していきたいと考えている。同じ街でHMDを10年以上継続している弘前(青森県)や谷根千(東京都)には、米国のような専門家の姿こそ見当たらないが、地域のフィルムを地域で残そうとする意識は着実に根付きつつある。HMDの楽しみ方をすっかり心得た常連の参加者が、司会進行に忙しい世話人に代わって映画フィルムの保存方法を解説する様子は実に頼もしい。また、そこから新たな世話人が生まれることもある。

2015年は「HMD京橋」がフィルムセンター(NFC)を会場に初開催され、新たに多くの方にこの記念日を知っていただくことができた。開催を実現したNFC職員の朴美和さんと宮澤愛さんは、実は前年のHMD谷根千会場のボランティア・スタッフだった。情熱が感染するように、国内のHMD会場は一つ、また一つと増えていくに違いない。次回の第14回HMDは2016年10月15日(土)に予定されている。HMDの今後の展開に、ぜひご注目いただきたい。

(NPO法人映画保存協会)

註

1 日本のHMD会場では当日その場でチェックをすることが難しく、先に募集して可否を判断することが多いようである。

2 リズ・コフィーは『家庭でもできるフィルム保存の手引き(Home Film Preservation Guide)』の著者の一人でもある。http://www.filmforever.org/

3 National Film Preservation Board. *Redefining Film Preservation: A National Plan*. Library of Congress, 1994. p 79.

▲第10回(2012年)HMD弘前会場スタッフ。左から竹森朝子、品川有希子、柴田賢、武林正書